

山行報告書

通算山行NO	NO・122S		報告者	加藤 秀子			
年月日	'98年 3月13日(金曜日)～		年 3月14日(土曜日)				
山行名	山スキーと登山(唐松岳・雨飾山)		天候	晴れ			
山名	唐松岳(2,696m)						
この山のセールスポイント	凄まじい烈風に唐松は遠くにある！						
コース及び タイム	裾野市役所5:00⇒白馬駐車場 9:50 ～ Gondola 10:15 ～ リフト最終地点11:15 ～ 駐車場12:55 ～ 小谷温泉(熱泉荘) 入浴15:30 ～ 雨飾旅館テン泊地15:40						
参加者	CL	後藤隆徳	51	この山は昔から風が強い	綱 八代	60	吹き飛ばされると思った
		棚田 禎	61	とにかく風が凄かった	加藤秀子	49	唐松へ再挑戦します
<p>整備されたオリンピック道路のお蔭か、車は以外にも早く白馬に到着。途中、車窓からきれいな曲線を描いたジャンプ台が2基見えた。感動が未だ新しい。駐車場でせわしく昼を済ませ、各々身支度を始める。今夜は唐松でテン泊だ。陽はサンサンと降り注ぎ八方の雪の白さが目に眩しい。ゲレンデにはカラフルな色彩のスキーヤーが右往左往していた。</p> <p>ゴンドラからリフトに乗り継ぐと、目前には剣岳に勝るとも劣らない猛々しい山容が、威圧感をもって迫ってくるではないか。『あれは何?何?』騒いでいると大根田が『五竜岳だよ。その向こうは鹿島槍だ』と教えてくれた。素晴らしい景観に胸が圧迫されそうだった。早鐘を打ち、五感が騒いだ。剣岳で感じたのと同じだ。ウー。この山に惚れた。</p> <p>リフト終点に降り立つと、そこは既に八方池山荘まで後わずかなのだが……。降りるといきなり突風に見舞われた。あわてて小屋の脇へ身を隠す。と、ガラガラガラッと大きな音をたて鉄製の長イスが風に飛ばされ転がり落ちていった。『これじゃ無理かな?』と言いながらも完全武装に身を包む。歩いて5～6歩尾根に上がると、物凄い凄まじい風に、ザックにつけたスキー板があおられ1歩も歩く事ができない。身を屈め這いつくばるようにするが、強靱なCLでさえもよろけていた。『駄目だ!引き返そう』CLの決定で下山となる。大根田・高岡はリフトで、CLと加藤はスキーで滑って下る。1年目泣かされた八方は3年目の今年はどうやら何とか滑って下れた。感激である。</p> <p>車を次の目的地、雨飾山の登り口、小谷温泉まで移動。登山口の確認をした後『熱泉荘』で一風呂浴びる。女性風呂は、湯が熱くとっても温まったが男風呂は冷たくて入っていられなかったとか。お疲れ様でした。近くに福寿草がいち輪、ヒソソリと綺麗な花を咲かせていた。</p> <p>さて、今日のテン泊地は何処へと探し歩く。あった。あった。以前レイホーで世話になったという雨飾旅館の入口手前に物置小屋があり、丁度4人用テントが張れる広さの場所だ。又、玄関の脇には、雪が積もらないようにパイプから常に温泉が吹き出しており洗面に丁度よい。早速テントを設営し、今日の夕食、シャブシャブの支度にとりかかった。</p>							

山名	雨飾山 P2 (1,838m)		報告者	加藤 秀子
この山のセールスポイント	急峻な山容・海谷山塊を豪快に滑降			
3月14日～日 コース及び タイム	起床4:30/発7:10～P2 10:40/12:00 ～テント設営地13:20 後隊15:40 着 小谷(抜り) 温泉で入浴～裾野着24:00			
標高差	△小谷温泉から登り標高差 1,000 m		体力度	1・2・③・4・5・6
	▼下り約 960 m		技術度	1・2・③・4・5・6
CL	後藤隆徳 51	3月結婚して5月に一人でこの山に登った	展望度	1・2・3・4・⑤・6
	大根田 61	良い山でした。つぼ足に苦労した		
	高岡 60	大変な山でした。でもよかった		
	加藤秀子 48	滑る事が今楽しめたよ!		
2 日 目	<p>シンと冷えきった早朝の冷気は肌に心地良い。雨飾旅館の裏手の道を歩いてわずか3分。除雪された道の終点でシールをセッティング。『カチャ』とビンディングに靴をはめ込む音で今日の一日が始まった。</p> <p>釜池林道を進んで行くと、雪に半分埋まった雨飾山荘を左手に過ぎ、やがて目前にポコポコと空に突き出した二つの山が急峻な形で現れた。『あれが雨飾山の双耳峰だ。無木立が見える』とCL。その儘解釈した加藤は『婿』と勘違い、『じゃ、その手前にあるピークは嫁だち?』と言って皆の鬨聲(おんせう)をかってしまった。</p> <p>ワセ沢を過ぎ、大海川が狭くなる手前から左側の狭い尾根にとりつく。樹林帯の急登は見通しも悪くかなりきつい。途中でつぼ足に変え、ズボズボ膝まで埋まるラッセルに四苦八苦するが、ワカン履きの大根田、スパッツを履いたが運のつきの加藤の二人が交替で挑む。高度差で200m程登ると傾斜も一段落し広いブナ林に出た。気がつくとガスが出始め雪が舞っている。カッパの上下を着込み、つぼ足からシール登行に変え見事なブナ林の中を絡むように快適に進む。</p> <p>荒管沢に出た所でCLと大根田は最終的なコースの確認をする。シール登行とつぼ足ではやはりシール登行の方が早い。大根田の為に目印として赤布を木に残しながら先に進む事になった。雪崩の危険が高い沢は迂回し、その儘林の中を通り抜けるとP2手前の狭い尾根に出る。ここは狭くアイスバーンになっていた為、加藤と高岡には無理と板を外しデポ。一気に登るとアイスクリームのようなドーム状のP2直下だ。</p> <p>CLはP2を仰ぎ見ながら『雪崩の跡かな?』としきりに呟く。その方向を見ると、真白い雪の斜面に薄青い透明な帯状のようなものが所々で光っている。そういえば『いまだ帰らず』の記録の中で雪崩の記録が載っていたが、そんなような事が書いてあった。そう</p>			



油	山
大	イ
床	日
谷小	石
さ	山
本	大
不	大
尺	新
大	新
大	井

(上)(甲) 林道から
ワセ沢を登る
(下) 美しいブナの
森をのぼる



- (上) 雪火煙を上げる
雨飾をバック
にP2にて
- (中) 黒々とした岩壁
が目立ち雨飾山
- (下) 重いタンホの
スキーはモモが
痛い

か。雪崩の跡はこういう感じになるのかと心に刻む。CLは腕組みをしながら暫く考え込んでいたが、『よし！此処までとするか。下ろう』とP2を背にし歩き始めた。

『マッいいか』と下り始めた2～3歩の所で『やっぱり行ってみるか』のCLの声。『ヤッタ～』急いで引返し、先頭きってドームにとりつく。急な斜面は一足一足丹念に蹴り込み跡を付けて行ったが、終いには四つん這いになった方が早いとばかり、手足をフル回転させチャッチャカ登る。途中後ろを振り返るとCLと高岡が浅い足跡をラッセルしていた。瞬間『マズイ！』そう思った。早く登る事だけを考えて後続者を頭に入れていなかったのだ。何の為の先頭かわからない。本当に申し訳なかった。その後はしっかりラッセルで直登する。

P2の頂上からは、いかつい岩肌の雨飾山がちょこんと見えるが、なかなか凄味があっている。厳冬期はザイルを使用しないと無理だと言うが、一度トライしてみたいと興味をそそる山だった。遅れている大根田を待たずに下っていくと、P2直下の所で出会う。P2迄登ると言う大根田を後にし板のデポ地まで下る。

ここからはスキーだ。CLと加藤は板を滑降用にセット。高岡は『下れそうもないので大根田を待って一緒に下る』と決めた。『下山には呉々も気をつけるよう』言い残しブナ林の中に溶け込む。CLの刻んでいったシュプールを遅れまじと必死になぞっていく。1～2分でブナ林を抜け目の前はバーンと開けた荒菅沢だ。山スキーの醍醐味はここにある。気持ちがいい程の大斜面を自由自在にシュプール描く。快適だった。2時間もかけて苦労した所もスキーだとわずか10分。あっけなく最初にCLと大根田が打合せをした場所に到着。『ウーン。ぐやじい。もう少し滑りたい』とはCL。ここからは林の中のグズグズになった深い雪を踏ん張りながら滑って行くが、切れ落ちた雪面を板を担いで降りる頃になるとワセ沢の林道にぶつかる。

平坦な車道の雪道は滑って行かず、CLのアイデアで板を歩きのモードに直しテレマークのように片足を蹴って前に押し出す。これは良かった。途中電信柱の雪に埋まった状態を調べていた男性に『今年の雪は？』と問うと『いつもの半分だね』との返事。『やっぱり今年は終わりか』とグズグズの悪雪にフラストレーションの溜まってしまったCLは元気がなくなった。

駐車場に着き、一息入れ高岡と大根田を待つ。暫くして無線を入れると高岡が、すぐ近くの大斜面に来ているようだ。急いでその方向をみると高岡の姿があった。『それでもスキー板を付けているぞ』とCLは大喜び。『ここからは歩く』という高岡に『滑って来い』と無線で指示。先程まで陽射しがあつた空が急に暗くなり雪が舞い始めた。斜面の降り口迄車を移動し、車中から高岡の姿を目で追う。『滑り始めた！アッ転んだ。アッハハハ。又転ぶぞ。やっぱり転んだ』と嬉しそうに実況中継するCL。そこへ大根田が戻ってきた。山スキー2年目の高岡に『よく頑張って滑って来た』と出迎え、その勇姿をカメラに納めた所で出発。

途中、小谷温泉で入浴しさっぱりと汗を流す。一杯やりながら明日の山行の検討をするが、やっぱり雪質が悪いだろうという事で中止となり、今日帰ると決定する。残念だが仕方がない。でも最後に一言。『まんぞく～。』高岡と加藤は声を限りに、山へ向かって叫んだ。